

## 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の4年度目)

### 1. 研究課題

(和文) 術数学—中国の科学と占術

(英文) Study on Shushu : Science and Divination in China

### 2. 研究代表者

(氏名) 武田 時昌

### 3. 研究期間

平成22年4月から平成27年3月まで

### 4. 研究目的 (400字程度)

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質や特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけでなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術数学を総合的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探る。

### 5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

毎月、研究発表集会を1回、読解ワークショップを2回行った。会読テキストとして取り上げたのは、『五行大義』『医心方』に加え、『卜筮元龜』『靈憲』等である。

研究発表集会においては、班員による研究発表に加え、多彩なゲストスピーカーを招聘して特別講演や全体討論会を行った。招聘した特別講師は、山口義久大阪府立大学教授、渡部武東海大学名誉教授、大平桂一大阪府立大学教授、郭秀梅北里研究所客員研究員等である。

また、術数学に関心を有する国内外の研究グループと連携を深め、大規模なワークショップを、7月19日～21日と9月13-15日に行った。後者は、円光デジタル大学ソウル分館にて韓国術数学学会と共催で実施した公開シンポジウムであり、150名を越える聴衆が集まった。年度末の3月28日には、大正大学にて東京ミーティング2014を開催し、班員による研究発表を行い、関東の研究者と情報交換を兼ねた討論会を催した。

11月1日から11月3日までの3日間、護王神社内の護王会館にて行われた医療文化史サロン展2013を共催し(医療文化史サロン協賛会、京都医学史研究会、京都府立医科大学社会科学研究室ほか4団体の共同企画)、併催イベントとして作家の山崎光夫氏を招いて伝統医療文化シンポジウム2013を催した。

## 6. 研究成果の概要 (400字程度)

2013年は、術数学の形成過程を明らかにするために、古代から近世に至る科学書、術数書に展開された理論構造を多角的に考察した。『五行大義』巻第三、第四、論配藏府の読解を通して、陰陽五行の五藏配当説を分析し、それが鍼灸医学の理論形成に果たした役割や思想的背景を考察した。『医心方』については、鍼灸医学、本草学の研究者に加えて現代医薬学者とともにそこに展開された治療法を解析し、その理論構造と今日的意義を探った。また、日書、『卜筮元龜』の占術理論の数理的把握を試み、先秦の方術から後世の易占を中核とする術数への変容の具体的様相を窺った。

主催した国際集会において、術数学的なアプローチによる科学史研究の必要性を提言するとともに、術数学の総合的研究プロジェクトの立ち上げを呼びかけ、中国、韓国の研究者と連携した国際共同研究の体制作りを推進した。年度末には、『術数学の射程—東アジアの「知」の伝統』を刊行した。

## 7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

### <出版>

- (1) 『術数学の射程』(2012年6月に行ったソウル大学を中心とする科学史研究者と実施した国際シンポジウムの研究発表者による論文集。掲載論文16篇。会議録の原稿を増補、加筆したもの、または新たな論文に差し替えたものを集録する。日韓両国でそれぞれ自国語に翻訳したものを出版することになっており、韓国語版も近々刊行される予定である)。

### <国際ワークショップ>

- (1) 術数学国際ワークショップ 2013-7「術数学と宗教文化」  
期間：2013年7月19日～21日 場所：人文研分館大会議室&本館セミナー室 1  
19日に卜筮元龜読書会、20日午前に附属図書館清家文庫資料調査、午後に術数学ワークショップ、研究発表(発表者：前原あやの(関西大学 O.D)・田中良明(大東文化大学講師)・大野裕司(台湾大学客座研究員)・佐々木聡(東北大学専門研究員)・清水洋子(福山大学講師))、21日午前に藤井有鄰館見学、午後に術数学国際シンポジウム2013「科学史、思想史から見た東アジアの宗教文化」において招待講演(講師：徐光台(清華大学通識教育中心・歴史研究所教授)・土屋昌明(専修大学教授)・三浦國雄(四川大学・文化科技協同創新研發中心教授)・姜生同院長)。
- (2) 日韓術数学シンポジウム「東アジアにおける術数学への多角的アプローチ」  
期間：2013年9月13-15日 場所：円光デジタル大学ソウル分館  
韓国の術数学学会との共催イベント、主催：円光デジタル大学東洋学科、共催：京都大学人文科学研究所術数学研究会、後援：韓国科学文明史研究所、韓国学中央研究院  
13、14日の公開講演会において、李東哲(龍仁大学校教授)・三浦國雄(四川大学教授)による基調報告と4セッションで日韓の研究者15名(術数学研究会メンバーは7名)による研究発表、15日にソウル都市風水踏査。

### <公開講演集会>

- (1) 藪内清博士追悼 東洋天文暦法研究国際研究集会2013  
期間：2013年6月2日 場所：人文研分館大会議室  
研究発表：呂鵬(京都大学文学研究科D1)「7世紀以前のインド数学・天文学—「アールヤバティーヤ注解」を中心に—」、Bill Mak(京都大学文学研究科D3)「ヤヴナジャータカにおけるインド天文学について—新発見のネパール写本を中心して」
- (2) 伝統医療文化シンポジウム2013

期間：2013年11月2日 場所：人文研本館大会議室

特別講演：山崎光夫（作家）「徳川家康と正倉院の秘薬—天下取りと長寿を導いた名薬—」、公開討論会：テーマ「伝統医薬の行方」

(3) 術数学東京ミーティング2014

期間：2014年3月28日 大正大学巣鴨校舎 5号館552教室

第1部 研究発表 テーマ「出土簡帛新探」（武田時昌（人文研教授）「納音数理考」、小倉聖（早大院生）「二十歳刑徳と刑徳七舎の刑徳運行について—『淮南子』天文訓と出土資料との比較を通じて—」、小澤賢二（南京師範大学客座教授）「浙江大『左伝』に認められる科斗文字について」）

第2部 合同討論会 テーマ「術数学の問題圏」（伊藤裕水（京大院生）「『尚書中候』初探」、田訪（京大院生）「劉師培の義例観と劉氏家学—『春秋左氏伝旧注疏証』を中心として」、高井たかね（人文研助教）「黄図珣『看山閣集』にみる乾隆前期の室内陳設」、鄭宰相（人文研非常勤講師）「フランス国立図書館蔵天文図初探」、曾我とも子（岡大院生）「雪見御所（平清盛邸）の立地と三合方術」、森村謙一（薬学博士）「明末清初の産業技術書について」）

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	4	14	7	10	246	95	112
国立大学	6	6	0		55	0	23
公立大学	3	6	1	3	61	15	35
私立大学	16	26	4	6	279	16	81
大学共同利用機関法人	1	1	0	0	18	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	2	2	1	0	12	6	0
外国機関	8	5	5	0	31	24	0
その他	7	6	0	0	73	0	0
計	47	66	18	19	775	156	251

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	48	
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )

※下段の( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		博士論文の指導	
論文数		3	
	うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名